

# 山

形島の南部に位置する長井市。田んぼに開かれたのどかな土地に、立派な卓球場がある。看板には「くにひと記念やくわ卓球道場」の文字。「くにひと」とは、現役時代は協和発酵キリンの主軸としてプレーし、今年からナショナルチームのコーチに就任した田勢邦史。「やくわ」は幼少期の田勢を指導し、この道場の代表である八鍬秀晴のことである。卓球場の中に入ると5台の卓球台が並び、小・中学生たちが生き生きとプレー。その奥に、うれしそうに



Hideharu Yakuwa

## PERSON 八鍬秀晴

文・写真=渡辺友  
text & photographs by Tomo Watanabe

表情を浮かべながら、手取り足取りで指導する八鍬の姿があった。八鍬と卓球の出合いは、小学校にあった卓球台。打ってみてすぐにその魅力にとりつかれた八鍬は、自宅が小学校のすぐ近くにあってたこともあり、毎朝一番に登校して打っていたという。とにかく無我夢中でボールを追いかけた。小学校を卒業し、中学校では当然のように卓球部を希望した八鍬だったが、彼の強い思いに反してその願いは叶わなかった。八鍬の父が警察官とい

うことで、母親からは剣道か柔道を強く進められたのである。決して裕福とは言えない家庭の経済事情もあり、家にあった大人の竹刀をもらってやむなく剣道部に入った。また当時の卓球部の顧問が、部員には学業の成績の良い生徒か、足の速い生徒ばかりを選ぶというのも卓球を遠ざける要因となった。卓球への思いを引きずったまま中学を卒業。高校でも卓球部に入ることはできなかった。多感な思春期である。普通ならば新しいものに目移りしていくものだが、

# 卓球ができることへの感謝の思い。

指導者への道に突き進んだ。「卓球をしたい子どもには平等にチャンスを与え、夢を叶える支えになりたい」。中学の時に卓球ができなかった八鍬には、そんな思いが胸の奥にあった。有望な小学生がいたことから、その子たちが中学生になる1976〜78年の三カ年計画で、全国タイトルを取ることを決意。選手のひとりの遠藤文一（80年インターハイ複優勝）の父、遠藤文雄が車庫を改造して卓球場を作ってくれ、365日練習ができる環境が整った。朝は5〜7時で指導し、朝練習が終わってから職場に直行。仕事が終わったらすぐに卓球場に戻り、18〜20時まで指導。中学校のOBや父兄の協力もあり、選手たちも着実に成長。そして、指導した豊田中は主力メンバーが3年生の最後の年に、全中の団体戦でベスト8に入った。念願の優勝は叶わなかったが、文字どおり全力で駆け抜けた3年間だった。

やめると決めていた八鍬は、全中の1カ月後に生まれた長男・卓の子育てのために、きっぱりと指導から身をひいた。中・高校生の時に卓球への思いを保ち続けた、いかにも東北人らしい粘り強さは対照的に、やめる時は思い切りが良かった。しかし、卓球から離れて10年後、八鍬は再び指導の機会を得る。山形国体に向けて、各小学校でスポーツ少年団が作られることになり、長井南卓球スポーツの指導をすることになった。そして、そこで出会ったのが田勢邦史だった。「邦史は、運動神経は良くないし、特別器用というわけでもない。でも異常なくらい卓球が好きで少年でした。よく以上かと思うくらい（笑）。足が遅くても練習はごまかさず、とにかく一生懸命。この子は強くなると思いました」。全日本選手権のダブルス種目で4回の優勝を誇る左ベン表のテクニシャンからは想像できないような八鍬の回想である。運良く、田勢と同じ代に全国で戦える選手も揃い、93年の全国ホープスで全国初優勝。また翌年は全日本カデットのダブルスで田勢・青木大輔ペアが優勝と、15年前に叶わなかった全国タイトルを相次いで獲得した。

世界選手権横浜大会では、妻の美貴江とともに、混合ダブルスの日本代表として出場。「横浜大会は地元のみならず応援しました。観客席から邦史を見た時は本当に感動しましたね。実は、大きすぎて決まりでは広げていけないという横断幕をこそそと広げて応援していました（笑）」と八鍬は照れくさそうに微笑んだ。そして、八鍬は一念発起して、定年の2年前に県の職員を辞め、07年に自宅の横に卓球場を建てた。それが「くにひと記念やくわ卓球道場」である。「邦史のように、周りに信頼されて好かれる選手、元気で素直で明るい選手を育てたい。そういう思いでこの名前にしました。世界で勝つとか、日本一を目指すとか、その前に人間として評価される選手になってほしいというのが一番ですね。そうすれば結果はついてきます」。道場を始めた時は地元の長井工業高の生徒の指導がメインだったが、徐々に年配のラージボールの生徒もとるようになり、昨年から小学生の指導もスタートした。「少しずつ生徒も増えてきて、遠くから通ってくる方もいて本当にありがたい。昔の教え子が手伝いに来てくれるのもすごくうれし、こうやって卓球ができるのもまわりの人のおかげだと感じています」。

くにひと記念やくわ卓球道場。広いスペースに卓球台5台を設置。また2階には宿泊スペースもあり、合宿を行えるようになった。

「八鍬先生は本当に卓球が好きで、指導に對しては非常に熱心な人でした。卓球に対しては細かいし、厳しい面もあったけど、卓球から離れると優しくして、家にも遊びに行きましたし、何でも話せるお父さんのような存在でした」。約7年間指導を受けた田勢は当時を振り返る。そんな不器用だが、懸命な教え子は、青森山田高の吉田安夫監督（当時）の目にとまり、そこから日本のトップへと駆け上がった。そして、09年

打ちたくても打てなかった時期を振り返った時、今の八鍬にあるのは卓球ができることへの「感謝」の思いだ。あの6年間があったからこそ、今の自分がある。卓球ができる喜びをかみしめながら、まるで初孫に接するおじいちゃんのような笑顔で、今日も八鍬は生徒とともに幸せな時を刻んでいる。



↑今年3月末には、田勢が帰郷し、道場で講習会も行われた。「八鍬さんには、指導者としてのアドバイスもいろいろいただきました」と田勢（写真右）

↓09年世界選手権横浜大会、田勢夫妻の混合ダブルスの試合の様子。左上の横断幕の左側を持っているのが八鍬



「くにひと記念やくわ卓球道場」を設立。07年に「くにひと記念やくわ卓球道場」を設立。07年に「くにひと記念やくわ卓球道場」を設立。

「くにひと記念やくわ卓球道場」を設立。07年に「くにひと記念やくわ卓球道場」を設立。



PROFILE ●やくわ・ひではる  
1945年8月15日生まれ、山形県出身。1975年から本格的に指導を始め、78年全国中学校大会団体ベスト8（豊田中）、93年全国ホープス優勝（長井南卓球スポーツ）、94年全国日本カデット複優勝（田勢・青木組）などの成績を残す。07年に「くにひと記念やくわ卓球道場」を設立